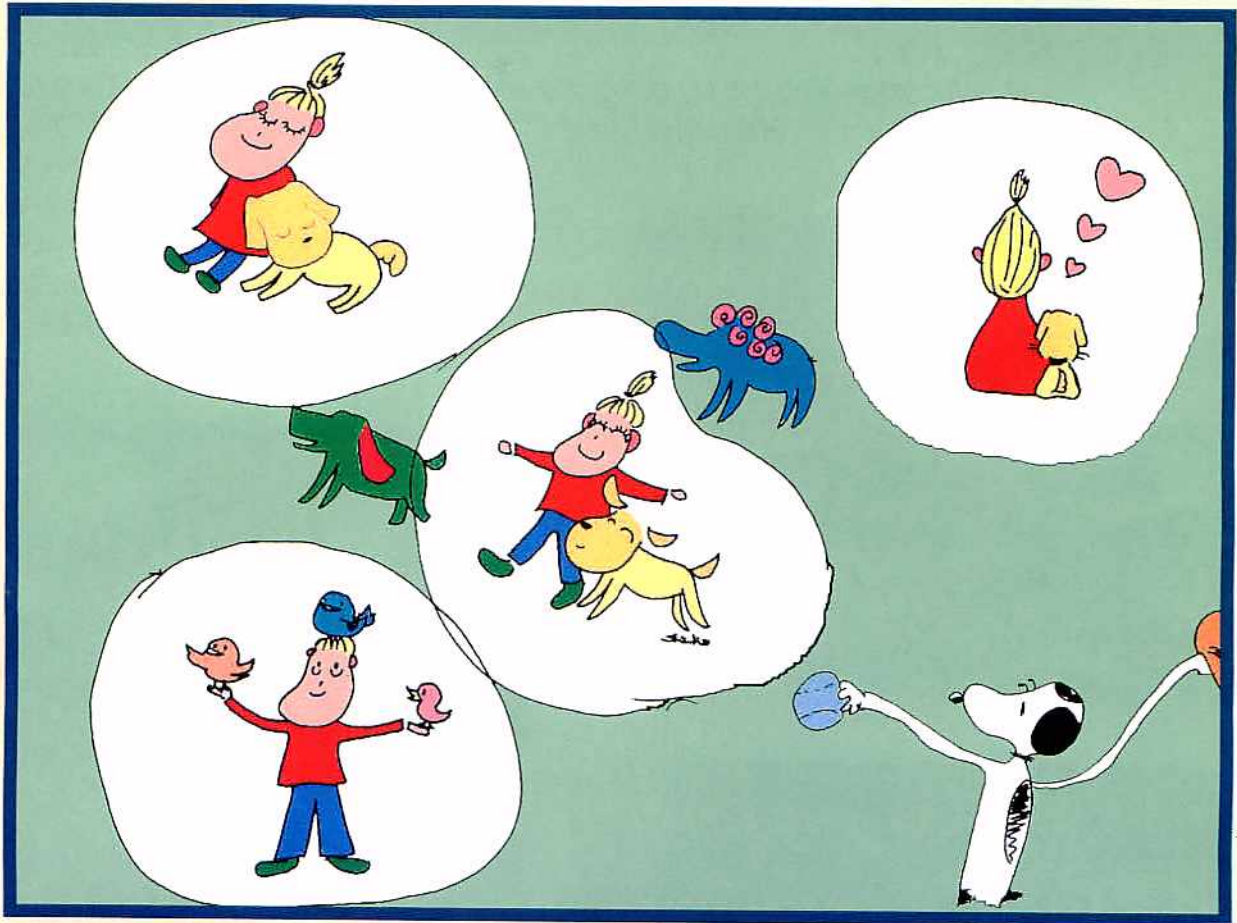


平成10年度特別展示

## 人と動物とのかがわり



## 人と動物とのかかわり

那 須 哲 夫 (家畜解剖学教室)

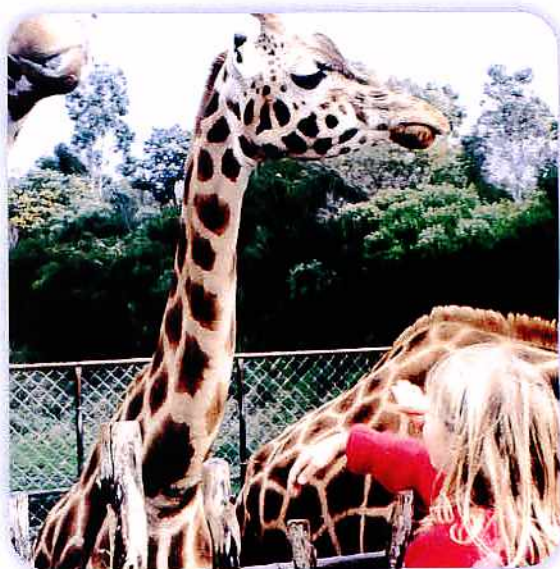
人と動物は太古の昔から、その生活運命をともにしてきました。長い間、動物たちは大切な食料源で、農業や輸送、軍用に携わり、また、崇拜の対象として、生活の一部を担ってきました。発展途上国では、このような認識が現在でも見られますが、先進国では動物は依然として食料に供されているのに、その位置づけを変化させてきています。近代科学の進歩は、本来動物の持っている人間に対する役割を失いつつあります。

動物が愛玩用として飼われたのは歴史的には古く、近年では核家族化がすすみ、動物が生涯の伴侶として扱われる例も少なくありません。動物と暮らすことは、楽しいだけでなく、人の精神的、肉体的な健康に役立つことが明らかになり、アニマルセラピーということばも出ています。また、人間よりも生と死が速いサイクルで訪れる動物たちの存在は、子供たちに科学では代えることの出来ない、命の尊さを身近に教えてくれます。

愛玩用に動物を飼うことは、様々なプラスの面がありますが、同時に問題も生じて

きます。動物には人に感染する沢山の病気があり、獣医学上大きな問題となっています。また、日本ではしつけの必要性や認識も、それに対するシステムも確立されていません。動物たちが天寿を全うするまで、責任を持って飼うことの義務、動物の病気に対する理解度は欧米諸国に比べ遅れているようです。

また、人と動物の関係で見落としてならないのが、野生動物の存在です。世界各地で開発が進み、本来の住処を追われる動物たち、水質、大気汚染で絶滅の危機にある動物たち。また、本来はジャングル奥深くで野生動物と共に、じっとしている病原体が開発によって突然現れ、猛威を振るい、沢山の犠牲者が出ている今日の状況。これらはすべて、人間が引き起こした環境破壊に対する、彼らの警鐘に他なりません。



# 人間社会に貢献する動物たち

那 須 哲 夫 (家畜解剖学教室)

井 田 隆 徳 (家畜生理学教室)

動物は昔から、家畜として人間に無くてはならない存在でした。その後、愛玩という性格を持った動物が飼育されるようになり、今日では伴侶動物(コンパニオンアニマル)という、人間社会の一員としての地位を得た呼び名に変わってきています。

伴侶動物(コンパニオンアニマル)は、従来の家畜のような、生活面での物質的功利性は見いだせません。なぜ、このような動物が人間生活に、深く浸透してきたのでしょうか。おそらく、動物は人の心の中に溶け込む何かを持ち合わせているのでしょう。動物は友達として位置づけられることにより、人の精神的健康と感情の安定を保ち、孤独な生活からの脱却を可能にします。また、人間どうしのコミュニケーション維持に役立ち、情緒を豊かにし、責任感を強くし、子どもの教育には最高の教材となります。

1970年代に、世界各地で人と動物の相互作用についての関心が高まり始めました。アメリカではデルタ協会という助成団体も出来、様々な活動の情報を

収集し、世界中にデータを提供しています。また、他の各国にも同じ様な団体があり、3～4年ごとに「人と動物の絆に関する国際会議」を開催しています。1998年のプラハ会議が第8回目に当たります。この会議には、獣医師や訓練士はもちろん、看護学や精神医学、教育学や老人医学など広範囲の分野からの参加があり、人間が生きていくうえで、動物がいかに大きな影響を与えているかを再認識する事が出来ます。

”アニマルセラピー”と言う言葉がよく聞かれるようになりましたが、デルタ協会では以下のように規定しており、アニマルセラピーという言葉は使っていません。



## Animal Assisted Therapy(動物介在療法、AAT)

AATは医療の一分野です。対象者の身体的機能や社会的機能および精神面の向上、または回復を目的とします。そこでは、目的に合わせた一定の基準を満たす動物が、不可欠な役割をもち、治療目標や治療計画の作成、具体的な治療の実施は、全て人間医療の専門家が行います。つまり、主導権は医師、看護師、理学療法士、作業療法士等にあり、活動は彼らの指示や監視のもとで行われます。ボランティアには、AAAに必要なとされる以上の動物や活動目的に対する知識、緊張感が要求されます。

## Animal Assisted Activity(動物介在活動、AAA)

AAAは対象者の身体的、精神的、生活の質を向上させるための動機づけ、教育やレクリエーションのための機会を提供することを目的としています。動物には一定の基準が必要ですが、実施者は、必ずしも医療上の専門知識を必要としません。しかし、対象者が高齢者、傷病者、障害者である場合が多いので、対人マナーなど、事前に十分学習しておくべきです。

日本では、日本動物病院福祉協会(JAHA)が全国的に活動しています。宮崎では、1995年に宮崎大学ボランティアサークルが中心となり、一般ボランティアの協力も得てAAAを始め、現在も月に1回の割合で犬や猫などを連れて、主に肢体不自由児に対して活動しています。

# 2

## 野生動物とのかかわり

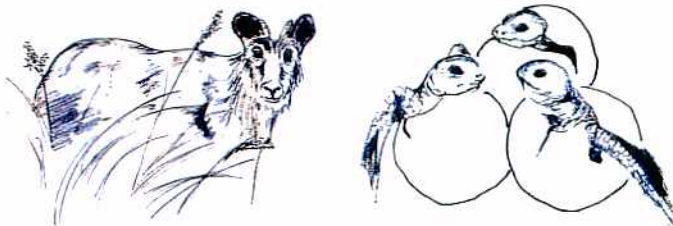
那 須 哲 夫 (家畜解剖学教室)

野生動物が環境破壊の指標になっていることは、言うまでもありません。宮崎にはカモシカ、ヤマネなどの天然記念物を含め約40種類の哺乳類、カンムリウミスズメ、カラスバトなどの天然記念物を含め約330種類の鳥類が住んでおり、アカウミガメの上陸、産卵地でもあります。



### ニホンカモシカ

ニホンカモシカは、北海道を除く全国各地に広く生息しています。近代になって数が激減し、また、学術的価値も認識され1934年(昭和9年)に国の天然記念物に、1955(昭和30年)に国の特別天然記念物に指定されました。その結果、全国的に個体数の回復が見られました。しかし、カモシカによる食害が各地で報告され、社会問題となりました。この問題解決のため、文化庁、林野庁、環境庁によってカモシカ問題を解決する行政的措置がとられ、これを機に、1985年(昭和60年)全国に十数カ所の保護地域を設定し、各地区体数と生息状況の定期的な調査が企画されました。宮崎では宮崎野生動物研究会が主体となって、県内のカモシカの生息する地域の調査を5年おきに行っています。調査内容は、各地域の植生の調査や糞の採取による単位面積あたりの生息状況の把握です。



ウミガメ～海から来たお客さん～  
石井正敏著 平凡社 より

### アカウミガメ

ウミガメ類の一種で、平均86×65cmの甲羅を持つ大型のカメで魚貝類を好んで食べます。日本に産卵上陸するのは、ほかにアオウミガメがいます。宮崎の海岸に上陸するのはアカウミガメでアオウミガメは沖縄、小笠原、屋久島に上陸します。

以前は、卵が食用に供されてきました。しかし、世界的な海洋汚染、漁業資源の乱獲、海岸線の改造工事などで生息環境が急速に悪化し、絶滅の危機にさらされるようになりました。宮崎市では保護のため1975年(昭和50年)、天然記念物に指定し、その保護活動を宮崎野生動物研究会に依頼しました。研究会会員の熱心なボランティア活動のおかげで成果は着実に上がり、1988年には宮崎県が天然記念物に指定しています。調査は毎年5月から8月までの間、高鍋町から青島子供の国までの海岸、全長約25kmの範囲で行われています。特に高鍋町、一ツ葉、子供の国の海岸では毎夜パトロールして、個体の形態と行動の記録および標識の装着を行っています。また、子供たちの啓蒙活動のため、毎年、高鍋と宮崎で“子ガメを送る会”を催しています。

宮崎の海岸は、日本でも有数のアカウミガメの産卵地ですが、近年のリゾート化のため上陸範囲が激減しています。

# 3

## 動物から人に感染する病気

堀井洋一郎（附属家畜病院）

人類が家畜を飼い、集団生活を営むようになった頃から、人は家畜から移る病気の存在を経験的に知っており、種々の伝染病に対する対策を講じていたことが、宗教行事や言い伝えなどからうかがえます。しかし、現在に至ってもほとんどが解決されないままに続いているのが現状です。病気の原因になるからといって、いたずらに動物を遠ざけたり動物との関わりを遮断するのはあまりに乱暴な発想です。人と動物の関係が不可欠であり緊密である以上、将来への問題としてうまくコントロールする方法を見いださねばなりません。

### 人畜共通伝染病(感染症) zoonosis

世界保健機構（WHO）の定義によれば、zoonosisとは「動物と人との間で自然に移行しうる全ての病気または感染である」とされます。病気を起こす生物、すなわち寄生生物（寄生体）には様々なものがあります。小さいもの（0.1ミクロン以下）から順にウィルス（エボラ出血熱、狂犬病、エイズ）、リケッチア（つつかむし病）、細菌（炭疽、結核）、原虫（マラリア、トキソプラズマ症）および寄生蠕虫（線虫症、吸虫症、条虫症）などがあります。



### 宮崎県内で発生が多い 野生動物の寄生虫による病気

肺吸虫症（肺ジストマ症）が良く知られています。ウエステルマン肺吸虫や宮崎肺吸虫の肺実質もしくは胸腔内感染により起こります。モクズガニ、サワガニ、イノシシ肉などの生食により、幼虫を経口的に摂取することで感染します。宮崎県は最も発症例の多い地域として知られています。血痰が主な症状ですが、胸水貯留（胸腔内に滲出液がたまること）や胸膜炎などの症状もみられます。また、希に虫が脳内に迷入することで重篤な障害が引き起こされ、失明する場合があります。

この冊子ではごく一部のzoonosisしか紹介できませんが、今までに良く知られていた古典的なzoonosisは日常の生活習慣の改善や衛生概念の啓蒙により、比較的コントロールしやすいものです。問題なのは、現在その存在が知られていませんが、近い将来人への病原性を発揮する可能性のある、いわゆる「zoonosis予備群」です。例えば一昨年話題になったO-157による食中毒は、動物の腸管にいる大腸菌のうちベロ毒素産生能を獲得したものによる感染症の例ですが、新たに同様の能力を獲得した菌の出現はこれからも起こりえます。

またイギリスでおきた狂牛病のように、プリオンと呼ばれるタンパク質による感染症？に至ってはzoonosisの概念そのものを変えねばならない事態ともいえます。エボラ出血熱のように本来の宿主のわからないウイルスによる病気も遠いアフリカでの出来事とばかりは言ってはいられません。我々動物の健康に深く関わる職業のものにとってzoonosisのコントロールは最も重要な課題のひとつです。

(図の説明：上、中間宿主のサワガニ  
下、カニの体内に寄生するメタセルカリア（感染幼虫）)

# INFORMATION

## インフォメーション

平成10年度の農業博物館の  
主な行事計画は次のとおりです。

平成10年4月13日～19日

'98年度（第39回）科学技術週間  
特別展示を開催いたします。なお、  
このテーマの展示は1年間続けます。

平成10年5月29日～6月1日

大学祭および開学記念日  
（期間中開館致します。）

平成10年11月上旬（土・日曜日予定）

大学開放（期間中開館致します。）

その他に各種の講演会等が館内の講義室  
において行われます。詳しくは電話等  
でお問い合わせ下さい。

農業博物館事務室

0985-58-2811(代)(内線3080)

TEL/FAX 0985-58-2898

平成10年度 農業博物館スタッフ

館長(併):岡田 芳一  
研究員(併):藤原 宏志  
事務補佐員:橋口土喜子

運営委員

小山田正幸 (農林計画情報学)  
目黒 貞利 (森林科学)  
吉田 直人 (生物工学)  
吉田 照豊 (水族生産学)  
平田 昌彦 (草地生産学)

寺尾 寛行 (植物生産科学)  
武藤 勲 (生産環境工学)  
武田 博 (生物資源利用学)  
芦澤 幸二 (家畜生産学)  
那須 哲夫 (獣医学)



## ◆ 編集後記 ◆

以前、長崎の漁師たちがイルカを殺したことに抗議して、米国の女性歌手が日本公演を中止したことがあります。彼女にとっては、イルカは水族館で芸をする、利口で愛らしい動物であり、漁師にとっては、大切な漁網を破る害敵でもあったのです。牛や豚をペットとして可愛がっているものや、犬や猫を食用にしているものは、あまりいません。カモシカも植えたばかりの苗木を食い荒らしますし、ウミガメも漁網を破ります。動物をどのように位置づけるかは大変難しいことです。ただ、一つだけ確実なことは、動物たちは生きるのに一生懸命なのです、人間もそこは見習いたいものです。

(T.N.)

なお本館は、本年4月1日から、文部省の省令施設「宮崎大学農学部附属農業博物館」として新しく発足する予定です。



ウミガメ～海から来たお客さん～  
石井正敏著 平凡社 より